

活重視 ③具体性 ④数量化—必要性・可能性—
⑤自発性・自主性の尊重 ⑥目標の視覚化・明確化
⑦自己洞察 ⑧個別化 ⑨フィードバックによる
自立学習 ⑩実行の評価による動機づけ

なお、LAC法は、来談者中心カウンセリング、
行動的カウンセリング、精神分析的カウンセリング
等既存のカウンセリング諸理論や技法を参考に
独自の方法を開発した。

(4) 特徴

わが国の大部分のカウンセリングや心理療法は、
森田療法、内観法を除いて、欧米から輸入された
方法である。欧米で開発された理論や技法を日本
人に適用している。本法は、独自の方法であり、
日本人の中に多発している無気力な生徒・学生・
社会人を対象にした意欲への脱出法である。

本法を適用して、大学生に対しては、本業に無
気力で自閉的になったり、副業に没頭して、休学、
退学傾向のある多数の学生を意欲的にし、卒業さ
せたり、社会人として活躍させるよう援助・助言
し効果をあげている。

最近、中高校では無気力から登校拒否になっ
たり、社会人のなかにも無気力から通勤拒否にな
ったりする人も多いが、こうした人に対するカウ
ンセリング技法として役立つと思う。なお、無計画
で生活している人に対する生活整理学でもある。

平成7年

◎6月28日

「物語的自己同一性」の概念をめぐって

久米 博

「物語的自己同一性」(identité narrative) と
はフランスの哲学者ポール・リクールがその著
『時間と物語』Ⅲの結論で提示し、次著『他者の
ような自己自身』でさらに発展させた概念である。
本発表ではその概念を紹介し、その適用可能性を

探ってみたい。

1. アイデンティティの問題

E・H・エリクソンによって、アイデンティティ
拡散という角度から現代人のアイデンティティが
問題にされたが、リクールはそれをハイデガーと
共通する存在論の問題としてとりあげる。ハイデ
ガーによれば、自分はいったい誰かという問いに
答えられるのは「現存在」としての自己がそのつ
ど自己であるときであり、彼はそれを「自己の不
断の自立性」と呼ぶ。だが現代人はその反対の
「不断の非自立性」に、つまりアイデンティティ
喪失に陥っているのではないか。それを典型的に
表現しているのがR・ムジールの小説『特性のな
い男』で、そこにおいて主人公の自我喪失は物語
性の危機に結びつく。逆に言えば「主体は自分
について自分に語る物語において自己認識する」
のではないか。それをリクールは「物語的自己同一
性」という概念で表現する。

2. 人間的時間の構成と物語的自己同一性

『時間と物語』三巻は、客観的時間と主観的時
間の不調和というアポリアを「物語られる時間」
に訴えて解決しよう試みた書である。人は時間を
物語ることによって時間を人間化するのである。
リクールは個人の自伝や民族の歴史物語の本質的
機能を物語的自己同一性の確認と規定する。つま
り自分の人生や民族の歴史を物語ることに
おいて、人は自己認識するのである。精神分析も
また、患者に過去を語らせつつ無意識の自己を
発見させる。しかし自己物語は、語る時点で一
定せず、自己愛や自己弁護に陥る危機はつね
にある。

3. 自己の構成と物語的自己同一性

リクールは『他者のような自己自身』で自己
の解釈学を展開しながら、物語的自己同一性の
概念をさらに精密に規定する。自己自身 (soi-même)

を自己 (soi) と同一 (même) つとに分解し、「自己としての自己同一性」と「同一としての自己同一性」とを区別する

同一としての自己同一性とは、唯一で同一の自己、連続している自己、性格のように不変の自己の同一性を指す。それに対し、自己としての同一性は「私は誰か」に答える自己性であり、自分の行為の責任を引受ける道徳的主体としての自己同一性である。自己同一性をめぐる難問は、この自己性と同一性を混同するところから生じる。物語的自己同一性が自己愛的満足に終わらないためには、自己性は他者性と対決しなければならない。「物語的自己同一性が真の自己性に等しくなるのは、倫理的責任を自己性の最高の要因とする決意の契機によってのみである」。

4. 自伝と物語的自己同一性

物語的自己同一性の概念を、J=J・ルソーの『告白』とJ=P・サルトルの自伝『言葉』とによって検証してみる。自伝において、作者、読者、主人公は同一人物である。ルソーの場合、執筆の動機に迫害妄想があり、矛盾だらけの自己を描きながらも、ルソーが追求するのは過去の自己と、執筆している現在の自己との感情的統一性で、両者の融合のうちに自我の充実感がある。サルトルの場合は、自由をめぐる「弁証法的寓話」として幼少年期を描き、それを全生涯に拡大する。興味あるのは、サルトルがその手法を、フローベール、ボードレールなど他者の伝記にも応用していることで、サルトルは自分にかたどって他者の生を理解しようとするのである。

平成7年

◎6月28日

ヨーロッパ第2次対戦勃発責任論

綱川政則

今年は戦後50年ということで、わが国でも、国会決議等でみられるように、戦争責任問題が改めて論じられている。なかでも注目されるのは、日本側の責任の軽減をはかるものに、西洋列強も植民地を支配した以上、日本のみを非難するのは公平を欠く、という論理であるが、それを知って私は今からおよそ30年前に欧米の学界で話題となった英の歴史家A・J・P・テイラーの「第二次世界大戦の起源」(1961年刊)を思い出した。それまでの独側とりわけヒトラーに専ら責任を追求するいわば定説に対して、西欧側の対独政策にも問題があったからには、独側のみを糾弾するのは妥当でない、と主張することによって結果的には独側の責任を相対化する点で類似性があるように思われたからである。

テイラーの主張はおよそ以下のようにまとめられよう。すなわち、戦後かなり時間が経過した以上、裁判官的態度ではなく、あくまでも公平に第二次大戦の勃発を論ずべきである。第一次大戦の敗北に際して分割されなかった以上、独の国力が復活するのは不可避であった。ヒトラーは彼以前の政治家達と同様に独の国力にふさわしい国際的地位を回復しようとしただけであり、やり方がやや乱暴であったにすぎない。西欧側がその点を充分認識し、適切に対応していれば、戦争は避けられた筈である。大戦初期の圧倒的勝利が初めてヒトラーの野望を増大させたにすぎない。

もちろんこのようなテイラーの主張に対しては定説派から反論がなされている。独側の侵略的意図を示す史料が多く存在することから、テイラー説は実証的には弱い、研究姿勢の面での公平へ